Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-06-25

# 極低出生体重児における未熟児無呼吸発作の検討(第一報)　未熟児無呼吸発作の実態

藤岡, 一路 ; 石田, 明人 ; 村瀬, 真紀 ; 伊東, 利幸 ; 湊川, 誠 ; 中岡, 総子 ; 山内, 淳 ; 豊島, 大作 ; 神岡, 一郎 ; 住永, 亮

(Citation)
日本未熟児新生児学会雑誌,19(3):457-457

(Issue Date)
2007-10

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(Rights)
利用に関する注意：ご利用は著作権の範囲内に限られます。

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001703

29

# 極低出生体重児における未熟児無呼吸発作の検討 第一報：未熟児無呼吸発作の実態

加古川市民病院　小児科

藤岡一路　石田明人　村瀬真紀　伊東利幸　湊川誠
中岡総子　山内淳　豊島大作　神岡一郎　住永亮

【目的】
極低出生体重児における未熟児無呼吸発作の実態、重症度を把握すること。
【対象と方法】
1996年1月～2000年12月までの5年間に当院NICUに入院した極低出生体重児256名のうち、IUGR、死亡退院、在胎25週以下、奇形、染色体異常を除く133名（在胎26週0日～33週6日）を対象とした。対象のうち7名は未熟児無呼吸発作以外の原因で経過中に再挿管となったため除外し、残りの126例を26～27週（A群：36例、614～1,288g）、28～29週（B群：45例、918～1,498g）、30週以上（C群：45例、1,172～1,498g）の3群に分類、無呼吸発作の重症度、治療経過について後方視的に検討した。無呼吸の治療は、ドキサプラム（Dox）、キサンチン製剤（Xan）、酸素を、当院NICUの治療方針に従い使用した。今回の対象中で、未熟児無呼吸発作の治療に、人工呼吸管理あるいはnasal-DPAPを要した症例はなかった。
【結果】
1）3群の人工換気の割合はそれぞれ、A群 100％、B群 80％、C群 44％、2）無呼吸の治療に関して、薬物投与は、A群 97％、B群 89％、C群 47％。薬物療法開始日齢は、A群 2.7 ± 2.3日、B群 2.0 ± 1.6日、C群 2.0 ± 1.8日、中止時期は、A群 修正36.1 ± 2.4週、B群 33.1 ± 2.4週、C群 33.4 ± 1.7週、3）A群は、酸素のみ3％、Dox単独使用16％、Xan単独使用3％、二剤併用78％。B群は、酸素のみ11％、Dox単独使用29％、Xan単独使用0％、二剤併用60％。C群は、酸素のみ53％、Dox単独使用33％、Xan単独使用0％、二剤併用13％。4）酸素は全例で使用し、中止時期は、A群 修正35.6 ± 2.0週、B群 34.6 ± 2.1週、C群 34.0 ± 1.4週、5）Dox使用はA群では修正30週で68％、31週で47％、32週で18％であり、B群では修正30週で90％、31週で33％、32週で8％と減少しており、いずれも修正31週前後で無呼吸の軽快を認めた。C群ではDox長期使用は少なく、重症無呼吸は稀であった。
【結論】
当院における臨床経過の検討より、在胎30週未満の未熟児無呼吸発作は修正31週を境に軽快していくことが明らかになった。在胎30週以上の児においては重症無呼吸は稀であった。